九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

長澤定夫回想録（その一）の補遺（インタビューから）

三輪，宗弘
九州大学附属図書館付設記録資料館

https://doi.org/10.15017/13889

出版情報：エネルギー史研究 ： 石炭を中心として. 24, pp.75-76, 2009-03-19. 九州大学附属図書館付設記録資料館産業経済資料部門
バージョン：
権利関係：

長澤定夫回想録（その一）の補遺（インタビューから）

解説　三輪宗弘

平成二十年十二月二十一日に福岡市東区唐原のご自宅に長澤定夫氏を訪問し、往時をうかがった。回想録と重複するところは割愛したので、この補遺は回想録を補完するものとして目を通していただきたい。同席した奥さんの話では、最近物忘れが多くなったとのことであるが、昔のことはよく覚えているとのことである。記憶違いもあるだろうが、貴重なメモアールである。「その一」としたのは、陸軍第三〇師団時代の回想録を「その二」として次号に掲載するからである。長澤氏は高齢者のボランティア誌である『文集　お便り』（後援　福岡市社会福祉協議会ボランティア・センター）に回想記を投稿しているが、今回転載したのは一〇九号（平成十五年四月）、一一〇号（平成十五年七月）、一一一号（平成十五年十月）である。

長澤定夫氏の父親は三井田川炭鉱で電気工として働いていたが、炭鉱と鉄鉱石の町であった本渓湖に渡り、その後平壌の朝鮮無煙炭会社真相炭坑に職を求めた。父は目を悪くし、マッサージで生計を立てていた。

長澤定夫氏は大正十二年九月八日に平壌で生まれ、六年間若松小学校に通い、船橋（せんきょう）高等小学校に二年間通学した。卒業後、平壌に本社のあった辰巳物産に入社し、機械工具（溶接器具、電気溶接棒など）の営業に従事した。昭和十八年十二月に歩兵第七七聯隊に入ったが、第三〇師団が平壌に来たので、第七七聯隊の病院は「附属第二陸軍病院」（第二野戦病院）と名称が変わり、ここに配属された。終戦後の昭和二十年十一月、ソ連軍が第二病院を接収したので、患者などを「第一陸軍病院」に移すときに脱走のチャンスをうかがい、逃げた。自宅が近かったので、いつでも逃走できるように、私服を準備していた。

二人で逃亡したが、リュックサックに食料（米と塩）を入れて、飯盒で炊いた。畑にあった大根、白菜、ホウレンソウなどを失敬し、食料とした。家の軒や倉庫で寝た。服を着込んでいたので、また軍隊で鍛えていたので寒くはなかった。途次五名ほどの日本人に出会い、七～八人で三八度線を渡った。三八度線には見張りなどはいなかった。開城から貨物列車に乗って、京城へ向かった。ほとんどが日本の民間人であった。

京城には日本人会の施設に入り、毛布にくるまって倉庫で寝たと記憶する。貨物列車はすし詰め状態で釜山に向け出発したが、運賃は無料であった。釜山には日本人会があり、二～三日波止場の倉庫で寝た。北船丸で二十年十一月に博多に上陸し、ＤＤＴで白くなった。引揚証明を受け取り、田川郡の親戚を頼って、田川に行った。昭和二十一年一月に三井鉱山田川鉱業所（第三坑）の仕繰夫（保線の仕事）として職を得た。

昭和二十一年九月に両親と二人の妹が引き揚げてきた。福岡日日新聞で引揚船の情報が掲載され、方面ごとであったので、博多港まで迎えに行った。引揚関係の新聞記事は毎日チェックしていた。

以下話が箇条書きになりますが本文の理解のために記します。

久留米の方から石鹸を三〇から五〇個受け取り、二〇～三〇個売った。一個五円ほど利益があった。

坑内で働くと、家族の分と含めて米を二合一勺プラス九勺プラス三合で六合もらえた。

七年八か月、三井田川に勤めたが、希望退職に応募して、惜しまれつつ三井田川炭鉱をやめた。

昭和三十一年に結婚して、薬種商の資格を取り、福岡市東区香住ヶ丘で薬局を営んだ。一〇年前に薬局をやめた。二人の息子は東京で暮らしている。

付記

明らかな誤字を訂正し、句読点を補うなど読みやすくしたところがある。